

『徒然草拾穂抄』の注釈態度

近世前期の徒然草注釈書を展望しながら

島内裕子¹⁾

要旨

北村季吟（一六二四～一七〇五）は、生涯に二つの徒然草に関する注釈書を著した。四十四歳の時に刊行した『徒然草文段抄』（一六六七年）は、その後、広く流布した。これは徒然草に関して書かれた膨大な注釈書群の中でも、定番的な地位にあり、近代以後にあつては、欧米の日本学者たちが徒然草を外国語に翻訳する際にも、参照されている。一方、季吟が八十一歳の時に、五代將軍・徳川綱吉に献上した『徒然草拾穂抄』（一七〇四年）は、『徒然草文段抄』の詳細な注釈を、わかりやすく簡略化して、そのエッセンスをすっきりとまとめている。

本稿では、まず、近世前期の徒然草注釈書の中に、『徒然草文段抄』の特徴と個性を明確化する。そのうえで、北村季吟が晩年に到達した徒然草観、ひいては、古典の注釈書のあり方の一端を、『徒然草拾穂抄』の注釈態度の中から見出すことを試みた。

なお、各種の徒然草注釈書における注釈内容を具体的に比較するにあたって、本稿ではひとまず、徒然草の第二十段までを対象とする。その際に、諸注釈書が指摘する徒然草と和歌・物語との関わりについて考察した。

はじめに

北村季吟は、徒然草の注釈書を、生涯に二度書いている。一つは、『徒然草文段抄』七卷（一六六七年刊。以下、『文段抄』と略す）で、この『文段抄』は、江戸時代に刊行された数ある徒然草注釈書の中でも、広く流布し、現代に至るまで、徒然草研究の基盤になっている注釈書である。ちなみに、徒然草の最初の翻訳書であるイービーの英訳も、『文段抄』²⁾によっている。もう一つは、『徒然草拾穂抄』七卷（一七〇四年成立）³⁾で、この注釈書は、注釈文の表現の随所に「候」という敬語が出てくる事実が示しているように、貴人献呈のための徒然草の注釈書である。実際、第五代將軍・徳川綱吉に献上されたものである。

『文段抄』は、門人を始めとして、広く一般の人々のために書かれ、『徒然草拾穂抄』は將軍綱吉のために書かれた。徒然草という同じ作品に対する注釈書が、

異なる読者対象を持ち、なおかつ四十年近い歳月を隔てている。このようなアウトラインからだけでも、これら二つの注釈書を比較検討するならば、北村季吟の徒然草への注釈態度の持続性と変容が明らかになるのではないかと予想できる。さらには、そのような考察は、徒然草自体の本質や、古典の注釈研究のあり方を考えるうえでも、重要な示唆をもたらすと思われる。

本稿の考察順序としては、『文段抄』に至るまでの近世における徒然草の注釈書を概観し、それぞれの特徴を把握したうえで、『文段抄』と『徒然草拾穂抄』を比較して、『徒然草拾穂抄』の注釈態度を考察し、北村季吟が到達した徒然草観を明らかにしたい。

なお、今回の研究で、各種の徒然草注釈書を比較するに当たり、第二十段までをその対照とした。このように考察章段の範囲を限定した研究では、全体像の究明にはほど遠いように思われるかもしれない。けれども、諸注釈書の注釈内容を徒然草全段にわたって比較研究するための第一歩として、まずは、『文段抄』『徒然草拾穂抄』のそれぞれが「第一巻」に収めている第二十段までを取り上げる次第である。

一 近世前期の主な徒然草注釈書とその特徴

徒然草は江戸時代に、広く読まれた書物であり、注釈書も数多く出現した。『徒然草寿命院抄』以来、『徒然草拾穂抄』までの百年間に、二十種類近い徒然草の注釈書が刊行されている。その中には、北村季吟以外にも、岡西惟中のように五年間で三種の徒然草の注釈書を著したり、閑寿のように『兼好諸国物語』（一七〇六年刊）という伝記を著した人物もあり、近世前期の徒然草研究において、北村季吟だけが突出しているわけではない。しかし、近代になってから、活

字本で繰り返し刊行されたのは、近世の徒然草の注釈書の中では北村季吟の『文段抄』がまず第一であり、また、諸外国の日本研究者たちが徒然草を翻訳する際に、季吟の『文段抄』に依拠することはあっても、惟中や閑寿の著作を中心に据えるものは管見に入っていない。『文段抄』が徒然草の注釈書として、永く命脈を保っていることの証左であろう。ちなみに、中野孝次著『すらすら読める徒然草』（講談社、二〇〇四年）では、句読点を『文段抄』によった旨が明記されている。

近世前期における徒然草注釈書の主なものを挙げれば、以下の通りである。

- ① 『徒然草寿命院抄』（秦宗巴・慶長九年・一六〇四年・二卷二冊）
- ② 『野槌』（林羅山・元和七年・一六二一年・十四卷十三冊）
- ③ 『鉄槌』（青木宗固・慶安元年・一六四八年・四卷四冊）
- ④ 『なぐさみ草』（松永貞徳・慶安五年・一六五二年・八卷八冊・挿絵入り）
- ⑤ 『徒然草古今抄』（大和田気求・万治元年・一六五八年・八卷八冊・挿絵入り）
- ⑥ 『徒然草抄（磐斎抄）』（加藤盤齋・寛文元年・一六六一年・十三卷十三冊）
- ⑦ 『徒然草句解』（高階楊順・寛文元年・一六六一年・七卷七冊）
- ⑧ 『徒然草文段抄』（北村季吟・寛文七年・一六六七七年・七卷七冊）
- ⑨ 『増補鉄槌』（山岡元隣・寛文九年・一六六九年・五卷六冊）
- ⑩ 『徒然草諺解』（南部草寿・寛文九年・一六六九年・五卷五冊）
- ⑪ 『徒然草大全』（高田宗賢・延宝五年・一六七七年・十三卷十三冊）
- ⑫ 『徒然草参考』（恵空・延宝六年・一六七八年・八卷八冊）
- ⑬ 『徒然草直解』（岡西惟中・貞享三年・一六八六年・十卷十冊・人名略伝と器物図）
- ⑭ 『徒然草諸抄大成』（浅香山井・貞享五年・一六八八年・二十卷二十冊）
- ⑮ 『真字寂寞艸』（岡西惟中・元禄二年・一六八九年・二卷二冊）
- ⑯ 『徒然草集説』（閑寿・元禄十四年・一七〇一年・二卷十五冊）
- ⑰ 『つれづれ清談抄』（岡西惟中・元禄十四年・一七〇一年・十卷）
- ⑱ 『徒然草拾穂抄』（北村季吟・元禄十七年・一七〇四年・七卷）

本稿は、北村季吟が辿り着いた徒然草研究の到達点を見極めるのが最終的な目的であるが、そのためにはまず、『文段抄』に至るまでの、主な注釈書を概観する必要がある。なぜならば、そのような概観によって、季吟が先行する注釈書

をどのように活用して『文段抄』をまとめたのか、それとも、あまり活用せずに独自性を打ち出しながら『文段抄』を著したのが明らかになると思うからである。そのことはまた、『文段抄』と『徒然草拾穂抄』の関係を考察する基盤ともなるであろう。ただし、⑨から⑰の考察は今後の課題とした。

先の一覧の中で、『寿命院抄』と『野槌』については、その注釈態度について、かつて考察したことがある。それらの拙稿で述べたことも取り入れながら、ここでは、まず諸注釈書の記述スタイルの特徴を概観しておきたい。

『文段抄』に関しては従来、秦宗巴の『徒然草寿命院抄』、林羅山の『野槌』、松永貞徳の『なぐさみ草』などを集成・集約して成り立っている側面が目まされてきた。『文段抄』の「総説」で、師説（松永貞徳）・『寿命院抄』・『野槌』を参照したと、季吟自らが述べているからでもあるが、『文段抄』に先行する『鉄槌』『句解』との関わりも測定する必要がある。少し先回りして述べるならば、『文段抄』は引歌に関しては、従来言われるほど、先行する諸注に依っていないように思われる。

さて、前記の十八種類の徒然草に関する注釈書のうち、本稿で取り上げる注釈書は、『文段抄』にいたるまでの①②③④⑤⑥⑦⑧の八種類と『徒然草拾穂抄』の合計九種類である。

①の『徒然草寿命院抄』には、徒然草の本文自体は書かれていない。徒然草の中から、語句を漢字片仮名で切り出し、注釈も漢字片仮名で記している。このスタイルは、その後は踏襲されず、二番目の『野槌』以下、徒然草の注釈書には、本文が付いている。『寿命院抄』が、徒然草を章段に区切り、番号を付したのは、これ以前の、徒然草の写本には見られないことで、注目される。章段に区切って番号を付すスタイルによって、注釈がしやすくなったと言えよう。

②の『野槌』は、本文も注釈も漢字平仮名表記である。ただし、振り仮名は片仮名で付けている。章段ごとに全文を掲載し、その後に二字下げで注釈を書いている。難語ごとに、本文を切り出して注釈がなされる。先行する『寿命院抄』の注釈をほぼすべて取り入れたうえで、さらに新しい出典を博搜して詳しく注釈している。ただし、『寿命院抄』からの注釈の引用部分に、『寿命院抄』の名前は出していない。

③の『鉄槌』は、本文と注釈は漢字平仮名表記、振り仮名は平仮名である。原則として、章段ごとに上段に注釈、下段に徒然草の本文を配するが、注が少ない箇所は、頭注欄を設けず、本文を上から続けて書いている。今回参照した版本の頭注には、項目ごとに「▲」を付しているので、視覚的に見やすいスタイルであ

る。注釈部分には、先行する①と②からの引用が多いが、両書の名前は出していない。

④の『なぐさみ草』は、百五十七図にのぼる挿絵が付いている点が大きな特徴である。記述スタイルとしては、章段ごとに、上段に注釈、下段に本文を配し、次に挿絵、さらにその段の大意を書く。先行する①と②からの引用に際して、書名は出してはいない。

⑤の『徒然草古今抄』は、章段ごとに、上段に注釈、下段に本文を配している点は、④と同様である。ただし、④の上段と下段の比率が、四対六くらいであるのに比べて、本書は注釈のスペースの方がやや大きい。本書の特徴は、先行する注釈書名を黒地に白抜きで略記していること、および挿絵が三十四図入っていることで、視覚的にわかりやすい。なお、挿絵は、④の『なぐさみ草』の挿絵と酷似しており、その挿絵を覆刻使用したものか。

⑥の『徒然草抄』は、著者の名前を用いて『磐斎抄』と呼ばれることもある。こちらの名称の方が他書と区別しやすいので、本稿でも『磐斎抄』と呼称する。本書は、④や⑤のように上下二段組みにせず、まず、章段ごとに本文を漢字平仮名表記で示し、その後、一字下げでその段の大意を少し小さな字で書いている。さらにその後、本文の高さに揃えて、注釈項目の表現を本文から比較的長く切り出し、一字下げでその注釈を少し小さな字で書いている。先行する注釈書名としては、『野槌』の名前を出している箇所もある。

⑦の『徒然草句解』は、①から⑥までのどれとも異なるスタイルで記述されている。すなわち、本文を大きな字で書き、注釈を付ける場合は、その大きな本文の途中に、小さく二行書きの割注で書き込んでいるのである。本文を続けてすらすと読むこともできるし、難語は、割注を読めばわかるので、見慣れてくると意外にわかりやすいレイアウトである。つまり、本文を読みつつ、注も同時に読める工夫がなされている。先行する注釈書の名前は出していないが、自説には「愚按するに」という言葉を長四角の枠で囲んで示している。

⑧の『徒然草文段抄』は、本文・注釈とも同じ大きさの字で、漢字平仮名表記である。ただし、振り仮名は片仮名。本文をまず示すが、各段をさらに細分化した節ごとに区切って、その一区切りづつに注釈を付けてゆくのが、①から⑦までと異なるスタイルである。注の部分は、一字下げで書いている。『寿命院抄』『野槌』や師説、すなわち松永貞徳の説など、先行する諸説を明記するとともに、「季吟云」「季云」などと書いて、自説も明記している。

⑨の『徒然草拾穂抄』は、漢字平仮名表記の本文の後に注釈を書き、振り仮名

は片仮名で付す。『文段抄』と同様の節の区切り方である。ただし、『徒然草拾穂抄』では、本文の傍らに、「い」「ろ」「は」「に」「ほ」「へ」「と」……というように、小さく書かれた符号が付いている。この符号が、注の番号を示す。そして、本文の後に置かれている注釈項目の冒頭にも、この符号が付いていて、どこに当該の注釈が書かれているか、その箇所が一目でわかるように工夫されている。このような記述法は、今回取り上げた他の注釈書に見られないものであるが、現代の学術論文によく見られる注の付け方と一致している。ちなみに、『徒然草拾穂抄』のような注のスタイルは、本居宣長の『うひ山ぶみ』でも採用されている。

二 序段から第二十段まで、各種の注釈書における引歌一覧

今回は、序段から第二十段までの範囲で、徒然草の注釈書を比較する。その際、先に概略を述べた『寿命院抄』『野槌』『鉄槌』『なぐさみ草』『古今抄』『磐斎抄』『句解』『文段抄』、および『徒然草拾穂抄』の九種類の中から、各注釈書で挙げられている引歌に注目してみた。というのも、徒然草の表現基盤は、広範囲にわたるが、その中でも、和歌文学の世界は、兼好が二条為世門下の歌人であった事実を鑑みても、重要であると考えられるからである。

以下の一覧に掲出した和歌は、その引歌が最初に出てきた注釈書の表記で示し、カッコ内に、その和歌を引歌として掲載している注釈書名を記入した。ただし、表記には濁点を付け、また、引歌の初出で、一首全体が表示されていない場合は、その旨を注記した。

この一覧によつて、注釈書が次々とまとめられていった近世前期において、どのような順序で、引歌が指摘されてきたか、その展開の一端が見えてくるであろう。一覧における各種の注釈書名は、原則として、たとえば『寿命院抄』は「寿」というように、冒頭の一字をもつて省略記号とする。また、『徒然草抄（磐斎抄）』は「磐」、『徒然草拾穂抄』は「拾」と略した。

「*」は、その注釈書で、引歌の出典が、たとえば「古今集」などのように明記されていることを示すものである。出典を明記した最初の注釈書にのみ、出典名も原文通りに併記し、その後の注釈書においても、その出典名が書かれている場合は、「*」の印のみ付した。

章段番号は、各注釈書により多少異なるが、現行の章段番号によつて統一した。

今回取り上げる徒然草の第二十段までの範囲で、各注釈書に、一首でも引歌が挙げられているのは、序段・第一段・第二段・第三段・第七段・第九段・第十一段・第十二段・第十三段・第十四段・第十五段・第十六段・第十八段・第十九段・第二十段である。その一方で、和歌の例示が全くないのは、第四段・第五段・第六段・第八段・第十段・第十七段である。

《引歌一覧》

【序段】

日ぐらしに山路のきのふ時雨しハ富士の高ねの雪にぞありける（寿、野*詞花、鉄、な*）

くれがたき夏の日ぐらしながむればそこはかとなく物ぞかなしき（野*伊勢物語、古*）

何となく硯にむかふ手習よ人にいふべきおもひならねば（寿*風雅、野*、鉄、な*、古*）

神無月風に紅葉の散時はそこはかとなく物ぞかなしき（寿、野、鉄、な、古）

【第一段】

我をのみおもふといはゞあるべきにいでや心はおほぬさにして（文）

身ハ捨つ心をだにもはふらさじ終にハいかゞ成と知べく（寿*古今、野*、鉄、な、古*）

秋の野になまめきたてる女郎花あなかしこまほしき花も一とき（寿*古今、野*、古*）

木にもあらず草にもあらず竹のよのはしに我身ハなりぬべらなり（野*古）

みよしの、たのむのかりもひたふるに君がかたにぞよるとなくなる（寿、野*伊勢物語、鉄、な、古*）

【第二段】

冬来てハ一夜二夜に呉竹の葉わけのつゆのところせきまで（句*定家）

【第三段】

恋せず人は心のなからましもの、あはれもこれよりぞしる（な、古*俊成、磐*、句*、文*、拾*）

おほぬさのひく手あまたに云々（文*古今十四、拾*）

いけどくあはぬ物からわが恋ハ雨露霜にぬれにけるかな（句*万葉）

シカリトテトスレバカ、リカクスレバアナイヒシラズアフサキルサニ（寿*古、野*、鉄、な、古）

たはれをと人ハいへどもまだしらずわれをかくせり頼のたはれを（野*万葉、鉄、な、古*）

秋クレバ野ベニタハル、女郎花イツレノ人カツマデミルベキ（寿、野、鉄、な、古）

【第七段】

あだし野のはぎのすゑこす秋風にこぼる、露や玉川の水（野*俊頼、鉄、な、古*古歌）

誰とてもとまるべきかはあだし野の草の葉ごとにすがるしら露（野*続古今西行、鉄、な、古*）

鳥辺山空に煙のもえたらばはかなくきえし我にしらなん（野*拾遺、古*）

思ひかねながめしかども鳥部山はてハ烟もた、ず成にき（野*詞花円融院御歌、鉄、な）

たき木つき雪ふりしける鳥辺野は鶴の心地こそすれ（野*後拾遺法橋忠令）

分きつる袖のけしきか鳥辺野、なくくかへる道芝の露（野*玉葉俊成）

夕暮ニ命カケタルカゲロフノアルカナキカノ世ニモスムカナ（寿、野、鉄、な）

今コソアレ我モ昔ハヲトコ山サカ行時モアリコシ物ヲ（寿、野*古今、鉄、な、古*、句*）

【第九段】
君コフル涙ノカ、ル冬ノ夜ハ心トケタルイダニネラレズ（寿*拾遺、野*、鉄、な）

イカ斗恋ノ山デノシゲ、レバ入トイリヌル人マドフラン（寿、野、鉄、な）

【第十一段】
サシ杉ノクルスノヲノ、萩ノ花チリナン時ニ行テ手ムケン（寿、野*万葉、鉄、な、古*）

岩そ、ぐ水よりほかに音せねばこ、ろひとつをすましてぞきく（磐*千載仁和寺法親王守覚）

おもひやれかけひの水のたえぐに成ゆくほどの心ほそさを(古)
思ひやれとふ人もなき山里のかけひの水のこゝろほそさを(句*上東門院中将)
松の風かけひの水にきゝかへて都の人の音信れもなし(文*風雅円光院入道関
白)

としをへてあれゆく宿の板庇かくても世にはあられけるなり(文*草庵頓阿)
ヨリテミバヲチゾシヌベキ秋萩ノ枝モタワ、ニヲケル白露(寿、野*古今、鉄、
な、句*)

【第十二段】

思フ事イハデゾタニヤミヌベキ我トヒトシキ人シナケレバ(寿、野*伊勢物
語、鉄、な、句*、文、拾*)

【第十三段】

としをさし枕草子のうへにこそ昔の人の夢もみえけれ(磐)

ことの葉のなをなくく尋れば昔の人にあひみつるかな(磐*新古今)

【第十四段】

かゝるもかくふすゐのどこもいやすみさこそしらねられめかゝらずもがな(文*
後拾遺和泉式部、拾*)

糸ニヨル物ナラナクニ別路ノ(心ボソクモヲモホユル哉)(寿*古今第九覇旅部
貫之、野*、鉄*、な*、磐*、句*、文*、拾*)

(冬ノ来テ山モアラハニ木葉フリ) 残ル松サヘ峯ニサビシキ(寿*新古今祝部成
仲、野*、鉄*、な*、磐*、句*、文*、拾*)

末の世も此情けのミかはらずと見しゆめなくバよそにきかまし(文*西行、拾
*)

ミな人の心のたねもかハラねバいまも昔のわかのうらなミ(文*新続古今)

【第十五段】

まこもかるみづのみまきのゆふまぐれねぬにめさますほとゝぎすかな(磐*三体
和歌慈鎮、文*「夕すゝみ」、拾*)

心あらんにみせばや津の国の難波わたりの春のけしきを(句*能因)

【第十六段】

みちすがら馬の上にてひくことをごとくに玉をぬくなミだかな(文*堀河後百
首王昭君)

【第十八段】

手にむすぶ雫ににごる山の井のあかでも人にわかれぬる哉(句)
さゝなみやしがのうら風いかばかりこゝろのうちのすゝしかるらん(磐、文*公
任、拾*)

【第十九段】

春ハ只花ノヒトヘニサク斗物ノ哀ハ秋ゾマサレル(寿、野*拾遺、鉄、な、古
、文、拾*)

花もみつ紅葉をもみつ虫の音もこゑぐおほく秋はまされり(文*万葉額田王、
拾*)

春秋におもひミだれてわかかねつ時につけつゝうつる心は(文*貫之)

百千鳥朝の空に遊ぶ也ことの外にも春めきにけり(文*有仲集、拾*)

野辺ミればわかなくつみけりむべしこそかきねの草も春めきりけれ(文*拾遺)

あらたまの年たちかへるあしたよりまたるゝ物ハうぐひすのこゑ(古)

聞人も心のどけき春の日の光に出る鶯の声(句*権大納言局)

久方の光のどけき春の日にしづ心なくはなのちるらん(句*紀友則)

青葉まで見れば心のとまる哉散にし花の名残と思へバ(句*西行)

散残る花かあらぬか夏山の青葉の下にかゝる白雲(句*経繼)

サ月待花橋ノ香ヲカゲバ昔ノ人ノ袖ノ香ゾスル(寿*古今、野*、鉄、な、句
、拾)

郭公花橋ノ香ヲトメテ鳴ハ昔ノ人ヤ恋シキ(寿、な)

むかしをば花たちばなのなかりせば何につけてかおもひ出まし(文*後拾遺)

色ヨリモカコソ哀トヲモユレ誰袖フレシ宿ノ梅モゾ(寿、鉄)

梅ノ花アカヌ色カモ昔ニテ同ジカタミノ春ノ夜ノ月(寿、野、な、古)

梅花誰カ袖フレシ句ヒゾト春ヤ昔ノ月ニトハハヤ(寿)

梅ガ香ニ昔ヲトヘバ春ノ月コタヘヌ影ゾ袖ニウツセル(寿、句*新古今家隆)

ねやちかき梅の匂ひにあさなくあやなく恋のまさる比かな(文*後拾遺)

山吹の花色衣ぬしやたれとへどこたへぬくちなしにして(古*遍照)

ふりぬれどよし野の川ハそこきよミきしの山ぶきうつろひにけり(句*新勅俊
成)

見ても猶おぼつかなきハ春の夜の霞の間にさけるふじ波(句*和泉式部)

我宿の花見がてらにくるひとはちりなん後や恋しからまし(句*古今躬恒、文*)

うきしづみねのミなかる、あやめぐさか、る恋路と人もしらぬに(文*狭衣)

昨日こそさなへとりしかいつのまにいな葉もそよと秋風ぞふく(野*躬恒、鉄、な、古、磐*、句*「稲葉そよぎて」)

マダ宵ニウチキテタ、ク水鶏哉タガ門指テ入ヌナルラン(寿、野、鉄、な、磐、拾)

よもすがらはかなくた、く水鶏哉させりともなき柴のかりやを(句*金葉源雅光)

シヅノヲガ垣ネニウツルカヤリ火ニスミワツラフタマ暮哉(寿)

夏なれば宿にふすぶるかやり火のいつまで我身下もえにせん(野*古今、磐*、句*)

しづのおがけぶりいぶせき蚊遣火にす、けぬ物はゆふかほのはな(野*拾遺風体抄慈鎮歌、鉄、な、句*、拾*)

賀茂川ノミナソコ清テ照月ヲ行テミントヤ夏ハラハスル(寿*後撰、野*、鉄、な、磐*、句*)

草の上の露とるけさの玉づさに軒端の梶はもとつ葉もなし(文*新勅撰、拾*)

秋萩のした葉色づく今よりや独ある人のいねがてにする(文*古今)

此ごろの暁露にわがやどの萩の下葉ぞ色づきにける(文*拾遺人丸)

なつ衣いと涙にそほちつ、おほしきこともいはずにけり(文*元真集、拾*)

玉マツル年ノ終ニ成ニケリ今日ニヤ又モアハントスラン(寿、野*曾禰好忠歌拾遺、鉄、な、古*、磐*、句*、拾*)

なき人のくる夜ときけど君もなしわがすむ宿や玉なしの里(文*和泉式部)

いかにねておくるあしたにいふ事ぞ昨日をこそと今日をことしと(句*後拾遺小大君)

春たつといふばかりにやみよしの、山もかすみてけさは見ゆらん(文*拾遺集忠岑)

けふに明てきのふに似ぬはミな人の心にはるのたちにけらしな(文*玉葉集貫之)

門松をいとなミたつる其ほどに春明かたに夜やなりぬらん(文*堀川百首、拾*)

【第二十段】

世ノウキメミヘヌ山路ヘイランニハ思フ人コソホダシ成ケレ(寿*古今、野*、鉄*、な*、古*、磐*、句*、文*)

三 各注釈書における引歌の比較考察

以上の「引歌一覧」を分析すれば、各種の徒然草の注釈書における第二十段までの引歌の認定状況、および引歌の継承状況がわかるので、章段順に注目すべき引歌を考察してゆきたい。その際に、引歌の考察だけでなく、各注釈書の注釈態度の特徴にも、適宜言及したい。考察の中で、各注釈書の書名は、先に列挙した近世前期の注釈書の番号で替える場合もある。

1 序段から第二段までの引歌の比較検討

【序段】 まず、序段の引歌であるが、四首とも、⑥⑦⑧の諸注釈書はこれらの和歌を挙げていないというのが大きな特徴である。すなわち、『磐斎抄』『句解』『文段抄』は、序段に書かれている「日くらし」「そこはかとなく」「硯向かふ」という表現の背後に、引歌を認めていない。徒然草の注釈書において、とりわけ『寿命院抄』と『野槌』の二書の影響力は大きく、これらに出て来る注釈は、ほぼすべてが後世まで踏襲されているような印象があるが、序段からして、決してそうではないのである。

【第一段】 第一段「いでやこの世に生まれては」は、徒然草が全般的に簡潔な短い章段が多い中であって、かなり長く詳しく書かれている段である。にもかかわらず、四首しか引歌の指摘がないのは意外な感じがする。ほんの短い一文からなる序段の引歌と同じ数だからである。

「はふれにたれど」「なまめく」「ひたぶる」の部分に、それぞれ一首挙げられている引歌は、すべて①②③④⑤の各注釈書で挙げられている。その一方で、ここでも序段の場合と同様に、『磐斎抄』『句解』『文段抄』は引歌を挙げておらず、この傾向、すなわち、引歌を指摘することが極端に少ないのは、とりわけ『磐斎抄』と『文段抄』に顕著である。

ただし、『文段抄』だけが、第一段の発語である「いでや」について、引歌を挙げていることが注目される。他の注釈書では、「いでや」という語句が発語・発端の言葉であることは注しているが、関連する和歌は引用していない。その中

にあつて『文段抄』は、「いでやとは、源氏などにおほき詞也。発語の詞といへり。何成とも其事をいはんとてまづいへる詞なり」というように、詳しくこの言葉の意味内容に踏み込んでいっている。それに続けて、「我をのみおもふといはゞあるべきにいでや心はおほぬさにして、と歌にもよめり」と書いている。

また、第一段の注釈で、他書が「かけず」という言葉の語釈として「度量ならぬ意也」（『寿命院抄』）のように、ごく簡単に書いているのに対して、『文段抄』は、「かけずけをさるゝ」という、ひとまとまりの言葉全体の意味を詳しくわかりやすく述べている。すなわち、このあたりの原文の意味を「あまた友なひたちならぶ人中にて、たとひ位貴く容もよく心さまよき人ととも、このひとは、無字にて才智なきといふになれば、威勢もおのづからくらべぐるしく、けをさるゝは、ほいなき事ぞと也」というふうには、丁寧な説明をしている。このように、語釈にとどまらず、文意を詳しく述べることは『文段抄』の特徴と言ってよく、随所に見られる。今引用した書き方のように、文末を「と也」とか「との心也」などと結んでいる箇所が、季吟の解説文なのである。

【第二段】この段については、『句解』だけが、定家の和歌を挙げている。ただし、「ところせき」という表現は徒然草と共通するが、兼好が定家の歌の表現を意識して、この段で使用したということではないだろう。これは引歌というよりも、あくまでも「参考歌」程度の指摘であるが、以後の章段においても、『句解』は、他書に見られない独自の和歌を挙げる傾向がある。

2 第三段の引歌から見えてくる『源氏物語』と「もののあはれ」論

【第三段】第三段の引歌で、特に注目したいのは、『寿命院抄』と『野槿』では指摘されていなかった「恋せずは人は心のなからましもの、あはれもこれよりぞしる」という歌が、『なぐさみ草』では第三段の「大意」の末尾に、「此段は此うたをもつて見るべし」と指摘されていることである。その後、『古今抄』の「色このまざらん」の語注では「俊成のうたに」と出典も明示して引用されることになる。さらに、第三段までに引歌を入れてこなかった『磐斎抄』と『文段抄』が、揃って「恋せずは」の歌を引いていることも特筆されよう。

【句解】では、この段の注釈の末尾に「恋せずは」の歌を挙げて、「引合見るべし」と結んでいる。【句解】は、先に、第二段のところでも触れたように、徒然草の注釈書の中で、引歌を挙げるのが少ないにもかかわらず、この第三段では、他にも独自の例歌として、万葉集の「いけどく」の歌を挙げている。ちな

みにこの歌は、今回、対象とした他の注釈書では挙げられていない。【句解】は、第三段以降の引歌も、他に取り上げられない歌を示すことが多く、独自の視点からの注釈姿勢が垣間見られるので、『句解』の独自性については、今後も留意したい。

ところで、先に述べたように「恋せずは」の歌は、『寿命院抄』と『野槿』に挙げられておらず、松永貞徳の『なぐさみ草』が初めての指摘であったことと、その後、この歌を取り上げた中に、加藤磐斎と北村季吟という、ともに貞徳の弟子であった和学者がいたことは、大いに関連するように思われる。貞徳からの師説として、この二人が注釈書に書き入れたという背景を、考慮に入れるべきかもしれない。実際、北村季吟の『文段抄』では、第三段の注釈の冒頭に『なぐさみ草』の大意を引用している。

ただし、『文段抄』の注釈の書き方で、とりわけ大きな問題をはらんでいると思うのは、『なぐさみ草』の大意には書かれていない「源氏物語一部の趣向、此段に有」という言葉が、俊成の「恋せずは」の歌の引用の直前に出てくることである。けれどもその一方で、同じ貞徳門下の『磐斎抄』は、俊成の歌は引用しているが、この言葉は書いていない。このことは、一体、何を意味するのであろうか。

このあたりの事情を明確にするために、第三段に対する『文段抄』の注釈を、もう少し詳しく示しておきたい。まず「よろづにいみじくとも、色このまざらん男ハ、いとさうざうしく玉の扨の当なきこ、ちぞすべき」という徒然草の第三段の冒頭の一文が書かれ、最初に「逍遙軒云」という書き出しで、貞徳の『なぐさみ草』の大意をほぼそのまま引用するが、その中で大意の冒頭の、「君子に三のいましめあり。若き時は色にありと文宣王ものたまへば」の部分はカットしている。また、大意では俊成の歌を掲げる直前に、「たとへば、良医の虫葉をのませんとては、さたうをさきへのまするがごとし」とあるが、季吟はこの一文をまるごとカットして、その替わりに、「源氏物語一部の趣向、此段に有」という一文を挿入してから、再び『なぐさみ草』の大意に書かれている内容とほぼ同じことを書き、俊成の歌を引用して、「此段は、此歌をもつてしるべしともいへり」と結んでいる。ここまで全体が、「逍遙軒云」の内容であると締め括ったのである。『なぐさみ草』自体には、「源氏物語一部の趣向、此段に有」という言葉はなくとも、講義の中で実際に貞徳が発言したかも知れない。だが、同門の弟子である加藤磐斎は、この言葉を『徒然草抄』に書いていない。「源氏物語一部の趣向、此段に有」は、北村季吟だけが聞いた言葉なのか、それとも季吟自身の考えの可

能性もあるのではないだろうか。

いずれにしても『文段抄』の第三段の注釈の中にこの言葉が出てくること自体に注目すべきであろう。というのも、「恋せずは人は心のなからましもののはれもこれよりぞしる」という歌(『文段抄』では、「心も」が「もののはれ」と「恋」をつよく結び付けた歌として著名なばかりでなく、なによりも『源氏物語』の最大のキーワードとして後に、本居宣長が「もののはれ」という一言を前面に押し出してくるからである。

宣長の心に、『源氏物語』全体を覆う言葉として、「もののはれ」がひらめいた時、そのひらめきは、宣長本人さえ気づかない意識の深層で、かつて読んだ北村季吟の『徒然草文段抄』のこの箇所が、なかったかどうか……。

しかも、季吟がこのあたりの徒然草の注釈で、「もののはれ」と『源氏物語』をワンセットで捉えつつ、それと徒然草の世界とを関連づけながら説くのは、今引用した部分に限らない。第三段の「露霜にしはたれて」から「まどろむ夜なきこそをかしけれ」の部分、すなわち『文段抄』の節の区切りで言うなら、第三段の第二節の注釈でも、再び次のように述べている点に注目したい。

季云、色好む人のありさまの、露霜といふより以下の体を、愛し、いへる詞也。和歌の道にハ、春夏秋冬恋雑と六つの道をたて、もてあそぶ中に、人のこゝろをやハラげ、もの、あハれをしらしむる事も、恋路にしくハなし。誠に、貴賤老少鳥獸の上までも生あるもの、心にはなれぬわざなれば、四季の次に必此題を出してよみくちずさび侍る事、外の道にハいまだ聞こえざれば、和国の道の奇特なるべし。兼好も歌人にて有ければ、かやうにかけらにて侍らん。彼俊成卿の歌をもちて此段をことハられたる師説も面白く、捨てがたき事なるべし。

ここで「もの、あハれをしらしむる事も、恋路にしくハなし」と述べ、「兼好も歌人にて有ければ」と指摘し、「彼俊成卿の歌をもちて此段をことハられたる師説も面白く、捨てがたき事」と書いている。このあたりの『文段抄』を読む者の心には、おのずと「もののはれ」という言葉が強く刻印されよう。

しかも、北村季吟はさらに続けて第四段の注でも、再び『源氏物語』に触れているのである。すなわち、第四段の注釈の最初に、「貞徳云」と書いて、『なぐさみ草』の大意を引用するのだが、その中に、「前の段に、好色のかたうど、なりたるやうの事かきたる次に、はや此段をかきて見せられしも又源氏物語一部、好

色の事をかきながら、下には出離生死のなかだちなるべき心ばへあるに、おのづから似かよひ侍るにや」という、『なぐさみ草』第三段の大意にはない文章が入っていることである。

北村季吟は、徒然草の第三段と第四段を連続読みすることによって、徒然草を『源氏物語』の一部つまり『源氏物語』の全体像と響映させているのである。そのような読み方は、加藤磐斎にはないことで、『磐斎抄』では、第四段の注釈で、『源氏物語』と引き合わせて読み解くことはしていない。

以上、徒然草第三段から第四段にかけての『文段抄』の注釈態度に注目すれば、徒然草と『源氏物語』は、藤原俊成の和歌を介在させることによって、「もののはれ」という点で繋がっていることを読み抜いた北村季吟の眼力には感服するばかりである。そのことは、本居宣長が『源氏物語』論のキーワードとして「もののはれ」という一言をしつかりと掴み取った道筋を示唆するのではないだろうか。

もちろん、徒然草の注釈書における引歌の検討からただちに、宣長の「もののはれ論」の淵源を徒然草に求められるとは思わない。しかしながら、少なくとも『源氏物語』を「もののはれ」の書として把握した先蹤として、北村季吟、ひいては季吟の師匠である松永貞徳の存在に注意を喚起したのである。

わたくしは、従来から、徒然草の第七段や第十九段に、「もののはれ」と言う言葉が何度か出て来ることを印象深く思っていた。これらの段は、徒然草の全体から見ても冒頭部に位置するため、読者の目に着きやすい箇所である。そのことと、宣長の「もののはれ」論の形成との間には、何らかの繋がりがあのではないかと、漠然と考えていた。けれども今回、徒然草の注釈書における引歌を詳しく調べる過程で、徒然草の本文自体には「もののはれ」と言う言葉が出ていない第三段や第四段の背後に、北村季吟が『源氏物語』の全体像を透視し、それを「もののはれ」という一言で括り出していたことに、気づいた。

宣長が『源氏物語』の中に見出した「もののはれ」は、季吟の『徒然草文段抄』を一つの母胎としていたのではなかったか。

3 第七段から第二十段までの引歌の比較検討

【第七段】 さて、第三段の引歌をめぐる考察は以上で締め括り、次に第七段に進もう。第七段は、諸注によって八首の引歌が指摘されているが、ここに一つ、大きな特徴が見られる。すなわち、これらの八首すべてが『野槿』で挙げられてい

る歌であり、『野槌』に先行する『寿命院抄』の時点での指摘は、そのうちの二首にとどまるという事実である。

つまり第七段に関する限り、これまでの状況と異なり、引歌の指摘は、ほとんどが『野槌』由来なのである。この後の章段でも、『野槌』による引歌の指摘は多く、このことは意外であった。儒学者である林羅山による注釈なので、徒然草の表現の背後に、漢籍からの引用を発見することが多いのはそのまま頷かれるのだが、和歌の指摘がこれ程多いのは、従来余り注目されていなかったのではないか。

わたくしはかつて、『野槌』における和歌・和学について、和歌関係の表現や語句などに新たな注釈を付けている箇所注目して、従来言われてきたより、羅山はかなり和歌に詳しいのではないかと推測して、第百二十四段・第百三十七段・第百三十八段・第百三十九段を挙げて、多少の考察を試みた。¹⁰⁾ その推論が、今回の第二十段までの引歌の調査の結果の考察からも補強されるように思う。

繰り返すようだが、第七段は、『寿命院抄』では、二首しか挙げていなかった引歌を、『野槌』が新たに六首挙げており、儒学者である林羅山は、和歌に関する幅広い教養の持ち主だったことが判明する。

【第九段】 第九段の引歌については、最初の注釈書である『寿命院抄』で早くも指摘されている歌が、それに続く『野槌』『鉄槌』『なぐさみ草』に踏襲される点で、今回の引歌の分布状況の全体的な傾向と一致している。

【第十一から第十八段】 次に第十一から第十八段までであるが、これらの段は、今までの段と異なる特徴的な傾向がいくつか見られるので、一括して考察したい。まず、第十一から第十八段までの引歌は、これまであまり引歌を掲げていなかった『句解』『磬斎抄』『文段抄』などが、それぞれ独自の歌を掲げており、それらは他書には出ていないという特徴がある。すなわち、『磬斎抄』と『文段抄』は、どちらも引歌をほとんど挙げず、その代わりに、徒然草の語句や文脈の意味を詳しく噛み砕いて説明するという注釈態度が見られるのである。

もう少し具体的に、各注釈書の引歌を検討してみよう。『磬斎抄』は、第十一段で他書に見えない千載和歌集の「岩そ、ぐ水よりほかに音せねばこゝろひとつをすましてぞきく」を挙げ、第十三段でも、やはり他書にみえない歌を二首挙げている。どちらも「昔の人に逢う」という意味の歌である。『新古今和歌集』という出典を示している歌の他に、「とじをさし枕草子のうへにこそ昔の人の夢もみえけれ」という出典未詳の歌が挙げられている。「枕草子」という言葉は、こ

こでは枕辺に置く草紙類という普通名詞なのであるが、清少納言の『枕草子』も思わせて興味深い。

また、『磬斎抄』と『文段抄』の二書だけが引く歌もある。第十五段の「まこもかるみづのみまきのゆふまぐれねぬにめさますほと、ぎすかな」第十八段の「さゝなみやしがのうら風いかばかりこゝろのうちのすゞしかるらん」の二首である。「さゝなみや」の歌は徒然草の「いかばかり心のうち涼しかりけん」という表現との一致度が高い歌であるところから採取されたのであろうか。これらの歌は、どちらも、彼らの師匠である貞徳の『なぐさみ草』には出ていない。

次に『句解』を見てみると、第十一の引歌「思ひやれとふ人もなき山里のかげひの水のこゝろほそさを」は、先の「引歌一覽」では、『句解』だけにしか引かれていないが、現代の徒然草注釈書において、この歌が引かれることがある。¹¹⁾ 高階楊順の「選歌眼」が、現代にも通用するものであったことになろう。

ちなみに、『句解』は、第三段では「たはれ」について、詳しく説明したり、第五段では『源氏物語』の橋姫巻に、第十九段では玉鬘巻に言及するなど、徒然草の表現の背景に『源氏物語』を透視することが目立つ。

『文段抄』が独自に指摘する引歌は、第十一に二首、第十四に三首、第十六に一首というように、これまでと比べて多くなっている。しかもこれらの歌は今回取り上げた他の注釈書には挙げられていない。ただし、第十四段の注で季吟は、兼好の歌人としての学識に注目しているの、おのずと引歌も博搜して、兼好の表現の背後を探索したのかもしれない。

また季吟は、これまで諸注ですつと踏襲されてきた『梁塵秘抄』に関する注の誤りを正している。すなわち、最初の注釈書『寿命院抄』以来、『磬斎抄』も『句解』も含めて、『文段抄』以前はすべて、『梁塵秘抄』を「後鳥羽院の編著」としてきたのだが、北村季吟が初めて『文段抄』の中で、「後白河院の編著」であることを明記して従来の誤りを正したのだった。

【第十九段と第二十段】 以上の比較検討を経て、今回の考察で最も引歌が多かった第十九段と第二十段を考察したい。第十九段は、序段以来、最も長い章段であり、内容も四季の変化を連続的に描き出しているの、表現の背後におのずと和歌的な世界が揺曳していることは、容易に予測される。

ここまで順に引歌を考察して、いくつかの新見を得ることができたのだが、第十九段の引歌を見てゆくと、改めてこれまで考えてきたことが再確認されるので、それぞれの注釈書の特徴のまとめもかねて、各注釈書における引歌の分布状況、すなわち、ある注釈書で指摘された歌が、他の注釈書でどの程度踏襲されて

いるかということ、逆に他書には踏襲されなかった独自歌に注目したい。そのような視点を設定すると、以下の三点が浮かび上がってくる。

第一に、最初の注釈書『寿命院抄』で指摘された歌は、その後も各書に踏襲されることが多い。ただし、その際に、踏襲しない注釈書として『文段抄』の存在が浮上する。たとえば、「引歌一覽」に挙げた第十九段および第二十段と関わる歌で、注釈書に引用される度合いが大きい「サ月待つ」「昨日こそ」「賀茂川ノ」「玉マツル」などを、『文段抄』は挙げていない。

第二に、引歌を挙げるのが全般に少ない『磐斎抄』『句解』『文段抄』は、それらが独自に挙げられている歌が、他書に継承されない傾向が強い。たとえば、第十九段で、『文段抄』は今までになく数多くの引歌を発掘し、『句解』のみが挙げられている独自歌も多い。けれども、これらの歌は、その後の注釈書にあまり引き継がれていない。

第三に、第十九段の注釈でとりわけ『文段抄』の独自性がよく表れているのだが、『文段抄』はこの段の要旨をまとめて書いており、兼好の散文執筆の力量を讃えている。そのような季吟の視点は、和歌表現の枠をはずして徒然草の文章自体を評価しようとする姿勢であり、そのことこそが、『文段抄』における引歌の少なさに反映しているのではないだろうか。

つまり、引歌を博搜するという姿勢は、表現のどこにでも和歌の言葉を見出すことになり、その結果として、徒然草の文体を和歌の表現によって評価するという方向性を持たせてしまう傾向がなきにしもあらずである。北村季吟はそれに対して、従来の徒然草注釈書の枠を越えた世界を、徒然草の表現の中に見出そうとした結果ではないだろうか。その姿勢は、第十九段を第百三十七段「花は盛り」と対比していることにも表れており、このような姿勢は、『寿命院抄』にも『野槌』にも見られないことである。

今回は、第二十段までという、限られた範囲でしか検証できなかった。それでも、引歌の指摘に注目すれば、近世前期における徒然草の注釈書の展開に、何段階かあり、注釈書ごとにくつかのグループ分けが可能であることがわかってきた。

『寿命院抄』を始めとする、『野槌』『鉄槌』『なぐさみ草』までが、第一グループである。これらの注釈書は、先行する引歌を撰取する傾向に近い。これは、引歌に限らないことで、語釈なども踏襲してゆく傾向がある。

その後、⑤から⑧までの注釈書になると、注釈者の個性を明確に出す傾向が強くなり、引歌もそれぞれが独自のものを指摘する例が目立ってくる。

その中であって、北村季吟の『文段抄』は、徒然草における章段相互の照らし合わせに言及することが多い。その傾向は『磐斎抄』にも見受けられるのであるが、それと比べてもずっと多い。また、季吟の場合は他の注釈書と比べて、徒然草とびたりと一致しなくても、全体の雰囲気似ている歌なども含めて挙げていることも特徴である。そのような注釈態度によって、例えば先ほど見たように、徒然草と『源氏物語』とを「もののははれ」というキーワードで繋げることが可能となったと考えられる。新しい観点からの研究として、評価できよう。

四 『徒然草拾穂抄』の注釈態度

これまでの考察によって、『文段抄』の注釈スタイルの輪郭がある程度浮かび上がってきたのを承けて、最後に、北村季吟によるもう一つの注釈書である『徒然草拾穂抄』の注釈態度に考察を進めて本稿を閉じたいと思う。

『徒然草拾穂抄』に関する先駆的な研究として、野村貴次「北村季吟の人と仕事」の第二章第三節所収の「『徒然草拾穂抄』」がある。その中で野村氏は、『文段抄』と『拾穂抄』の間に約四十年に近い隔たりがあるにもかかわらず、学説においてはほとんど進歩のあとがみられない」と述べているが、今回、第二十段までの注釈を比較してみると、新たな注釈上の工夫がいくつかある。季吟の『文段抄』は、それ以前の徒然草をめぐる注釈書の一つの到達点ともいうべき、質量ともに充実した注釈書であるが、季吟は晩年に、どのように自分自身で評価していたのだろうか。季吟はかつての著作『文段抄』をいかにして乗り越え、さらなる高みを目指したのか。

『徒然草拾穂抄』の注釈態度の本質を示すと思われる変化がある。『文段抄』においては、他の先行する注釈書と異なる引歌を指摘することに力点を置いていた。ところが、『徒然草拾穂抄』では、多くの他の注釈書で指摘されている歌を、積極的に取り込むようにしているのである。

たとえば、第十九段の引歌として、先に見たような『文段抄』で独自に指摘していた和歌をすべて挙げることはせず、むしろ『文段抄』では載せなかった他書の引歌から、水鶏の歌の例として、「まだ宵にうちきてた、く水鶏かなたがかとどさしていれぬなるらん」を挙げている。また、これも諸注ではどれも挙げていない『文段抄』では触れていなかった「玉まつる年のをわりにけりけふにハ又やアハんとすらん」を挙げている。

このような例が、調査対象を第二十段までに限った場合でも、いくつもあ

北村季吟は晩年になって、徒然草の注釈方法を変化させた。それが、引歌の指摘に、顕著に反映しているのである。『徒然草拾穂抄』において季吟は、通説に従う柔軟な面が出てきたのではないだろうか。

その一方で、近代以後の徒然草研究のスタイルを思わせるような、文意を長く説明し、口語訳に近い注釈を書き付けている箇所もある。今回は、引歌に焦点を据えたので、注釈スタイルの検討は今後の課題として残っている。

たとえば、『徒然草拾穂抄』における、次のような書き方は、当時の古典研究において、新しい試みであったのではないか。序段に対して、『徒然草拾穂抄』は、次のように詳しく文意を読み解いている。

つれづれと身しづかに心さびしきあいだ、硯にむかひて、心にさまづつりくるよしもなきことをも、そこもなくかきつれば、我ながら、奇怪ふしぎにこそ、物ぐるひのいひしことのやうなれど、此さうしもありさまで、卑下して申せしことばにて候。

このような書き方は、序段全体をわかりやすく説明する姿勢が見えて、徒然草の作品世界を理解する手ほどきとなっている。また、『源氏物語』の帚木巻の冒頭における草子地を意識したかのような、季吟の注釈である。

北村季吟が最晩年に、もう一度徒然草の全体にわたって、出典や引歌の掲載を吟味し直して、学者としての学識の披瀝よりも、読者が徒然草をよりよく理解するための必要最小限の指摘にとどめ、その一方で、文意をわかりやすくするために、長く本文を切り出して口語訳とも言えるように解説した点に、北村季吟の古典研究の、さらなる到達点を垣間見る思いがする。『源氏物語』研究に一時代を画した季吟の古典観は、徒然草の注釈書の中に凝縮され、平易なかたちで次の世代に手渡されたのである。

今回は、『文段抄』とそれ以前の諸注釈書における引歌の比較検討に費やした記述が多くなり、『徒然草拾穂抄』の注釈態度を明らかにする第一歩を踏み出すに留まったが、今後も、今回の考察を土台としながら、さらなる研究を進めてゆきたい。

注

(1) 拙稿「徒然草研究の起源——欧米における研究から問い直す」(『中世文学』五十二

号、平成十九年六月)参照。

(2) 北村季吟は数多くの古典の注釈書を著しているが、『伊勢物語拾穂抄』『百人一首拾穂抄』『万葉集拾穂抄』『古今和歌集拾穂抄』など、作品名の後に「拾穂抄」と付けているものが複数ある。本稿で「拾穂抄」と略称すると、それらと紛らわしくなるので、省略せずに、『徒然草拾穂抄』という名称のままとした。

(3) 拙稿「徒然草古注釈書の方法——『徒然草寿命院抄』から『野槿』へ」(『放送大文学研究年報』第十八号、平成十二年)。

(4) 『文段抄』の冒頭に位置する総説に、先行する徒然草の注釈書を挙げたうえで、以下のように述べている。なお、句読点は、私意に付した。

これらの外にもれて、何のひろふべきおちほもあるべきながら、猶おなじ事、今更にいはいにもあらじとて、まづ彼寿命院の抄をもと、し、それにもらせる所を野槿に勤へ、かつ師説をまじへ、しりへに愚意の了簡をかきつらねて、門人にたよりするものならし。

なお、今引用した部分で、二点注目したいことがある。一つは、「何のひろふべきおちほもあるべきながら」という表現は、「ひろふべきおちほ」＝「拾ふべき落穂」であり、『徒然草拾穂抄』という書名の背景を示唆していること。もう一つは、「猶おなじ事、更にいはいにもあらじ」という表現が、徒然草の第十九段にある、「同じ事、また今更に言はじともあらじ」を踏まえており、徒然草注釈書の総説の表現としてまことにふさわしいことである。このような何げない所にも、季吟の自在な書き方が垣間見られよう。

(5) 九種の注釈書は以下の諸本によった。ただし、引用にあたり、表記・句読点など、多少改めた場合もある。また、参照した先行研究も掲げた。

・『徒然草寿命院抄』

川瀬一馬解説『徒然草寿命院抄』(松雲堂書店、昭和六年)

吉澤貞人著『徒然草古注釈集成』(勉誠社、平成八年)

・『野槿』

吉澤貞人著『徒然草古注釈集成』(勉誠社、平成八年)

・『鉄槿』

『徒然草鉄槿』(無刊記、江戸通油町 山形屋利平開板、四卷二冊)

小松操「『徒然草』鉄槿考略」(『金沢文庫研究』九五号、一九六三年一月)

・『なぐさみ草』

吉澤貞人著『徒然草古注釈集成』(勉誠社、平成八年)

・『徒然草古今抄』

『徒然草古今抄』(万治元年、大和田久左衛門、八冊) 早稲田大学古典籍総合データ

ベース

- 小松操「徒然草古今鈔」と草子類の朗読（『金沢文庫研究』八七号、一九六三年二月）
- ・『徒然草抄』
- 有吉保編・加藤磐斎古注釈集成3『長明方丈記抄・徒然草抄』（新典社、昭和六十年）
- 吉澤貞人「加藤磐斎著『徒然草抄』——「卷第二」の翻刻」（金城学院大学論集・国文学編）四十号、平成十年三月。
- 吉澤貞人「加藤磐斎著『徒然草抄』——「卷第二」翻刻」（金城学院大学論集・国文学編）四十一号、平成十一年三月。
- ・『徒然草句解』
- 『徒然草句解』（寛文五年孟秋吉祥日 風月庄左衛門開板、七卷七冊）
- ・『徒然草文段抄』
- 北村季吟古註釋集成18『徒然草文段抄・上』（新典社、昭和五十四年）
- ・『徒然草拾穂抄』
- 北村季吟古註釋集成20『徒然草拾穂抄・上』（新典社、昭和五十二年）
- (6) ちなみにこのようなレイアウトは、⑩も同様であるが、『諺解』では、頭注が漢字片仮名表記になっている。
- (7) 「秋の野に」と「みよしの、」の二首は、どちらも『寿命院抄』では、上の句しか示されておらず、下の句は省略されている。
- (8) この歌の四句、『野槌』は「われをかくせり」、「なぐさみ草」は「われをかへせり」。
- (9) この歌の末句、『寿命院抄』は「ツマデミルベキ」、「野槌」は「つまとみるべき」。
- (10) 注(3)の拙稿「徒然草古注釈書の方法——『徒然草寿命院抄』から『野槌』へ」の第四節「『野槌』における和歌の注釈」で述べた。
- (11) 三木紀人『徒然草(一) 全訳注』（講談社学術文庫）、久保田淳『徒然草』（新日本古典文学大系『方丈記 徒然草』、岩波書店）など。
- (12) 新典社、昭和六十一年。

(二〇二二年十月三十一日受理)

Tsurezuregusa-Shusuisho considered as a commentary

Yuko SHIMAUCHI

ABSTRACT

Kitamura Kigin (北村季吟, 1624-1705) wrote two commentaries on *Tsurezuregusa* (徒然草) in his life time. At the age of forty-four he published *Tsurezuregusa-Mondansho* (徒然草文段抄, 1667), which afterwards circulated widely and secured a renown as a standard among countless commentaries upon *Tsurezuregusa*.

In modern times, *Tsurezuregusa-Mondansho* has been much consulted by Western scholars who translated *Tsurezuregusa* into their languages. These facts indicate the excellence of *Tsurezuregusa-Mondansho* as a work of scholarship.

Kigin, when he was eighty-one years old, dedicated to Tokugawa Tsunayoshi (徳川綱吉), the fifth Shogun, an abridged version of *Tsurezuregusa-Mondansho* titled *Tsurezuregusa-Shusuisho* (徒然草拾穂抄, 1704), which selected compactly the essential parts of detailed arguments in *Tsurezuregusa-Mondansho*.

This paper firstly tries to illustrate the characteristics of *Tsurezuregusa-Mondansho*, paying special attention to Wakas quoted in eight different commentaries on *Tsurezuregusa* written in the early modern period. Secondly it considers Kitamura Kigin's final view on *Tsurezuregusa* attained in his last years, which offers a specimen of old Japanese commentators' attitude to their classics.